

2 各設問の回答結果及び特徴点

問1 あなたは、「差別」について、どのような考えをお持ちですか。(ア)～(キ)それぞれについて、いずれか1つに○をつけてください。

1 そう思う 2 ややそう思う 3 どちらともいえない 4 あまりそう思わない 5 まったく思わない

(ア) 差別は人間として恥すべき行為である

(イ) 差別されている人は、まず、自分たちが世の中に受け入れられるよう努力することが必要だ

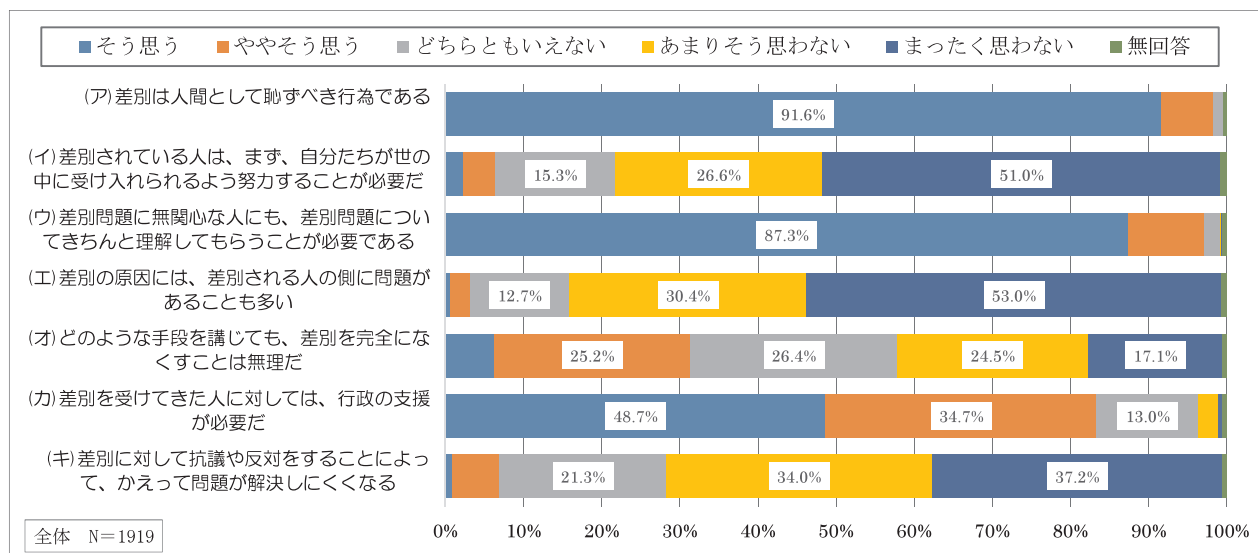
(ウ) 差別問題に関心な人にも、差別問題についてきちんと理解してもらうことが必要である

(エ) 差別の原因には、差別される人の側に問題があることも多い

(オ) どのような手段を講じて、差別を完全になくすことは無理だ

(カ) 差別を受けてきた人に対しては、行政の支援が必要だ

(キ) 差別に対して抗議や反対をすることによって、かえって問題が解決しにくくなる



項目 (ア)、(ウ)、(カ) は、「そう思う」と回答した割合が高い。年齢層別に示すと次のとおりである。

	50 歳以上	40 歳代	30 歳代	20 歳代	差
(ア) 差別は人間として恥すべき行為である	94.7	91.7	89.4	83.6	11.1P
(ウ) 差別問題に関心な人にも、差別問題についてきちんと理解してもらうことが必要である	91.7	87.6	83.6	77.6	14.1P
(カ) 差別を受けてきた人に対しては、行政の支援が必要だ	60.2	44.0	40.1	25.4	34.8P

項目 (イ) について「まったく思わない」51.0%、「あまりそう思わない」26.6%で、合わせると77.6%であり、項目 (エ) について「まったく思わない」53.0%、「あまりそう思わない」30.4%で合わせると83.4%である。年齢層別に示すと次のとおりで、20 歳代の割合がやや低くなっている。

	50 歳以上	40 歳代	30 歳代	20 歳代	差
(イ) 差別されている人は、まず、自分たちが世の中に受け入れられるよう努力することが必要だ	80.4	76.9	78.5	69.8	10.6P
(エ) 差別の原因には、差別される人の側に問題があることも多い	86.2	82.6	82.2	78.0	8.2P

「どちらともいえない」とする態度を保留する回答が、項目 (イ) が15.3%、項目 (エ) が12.7%、項目 (オ) が26.4%、項目 (キ) が21.3%と多くなっている。

問2 あなたは、次のようなことがらについて、人権上問題があると思いますか。(ア)～(ク)それぞれについて、あなたの考えに近いものをいずれか1つに○をつけてください。

1 問題がある 2 やや問題がある 3 どちらともいえない 4 あまり問題はない 5 問題はない

(ア) 家族が不在の時は、介護が必要な高齢者を家から出られないよう身体拘束する

(イ) 結婚する際には、相手の出身地を調査する

(ウ) 自治体の体育館を借りようとしたら、車いすバスケットであることを理由に断られた

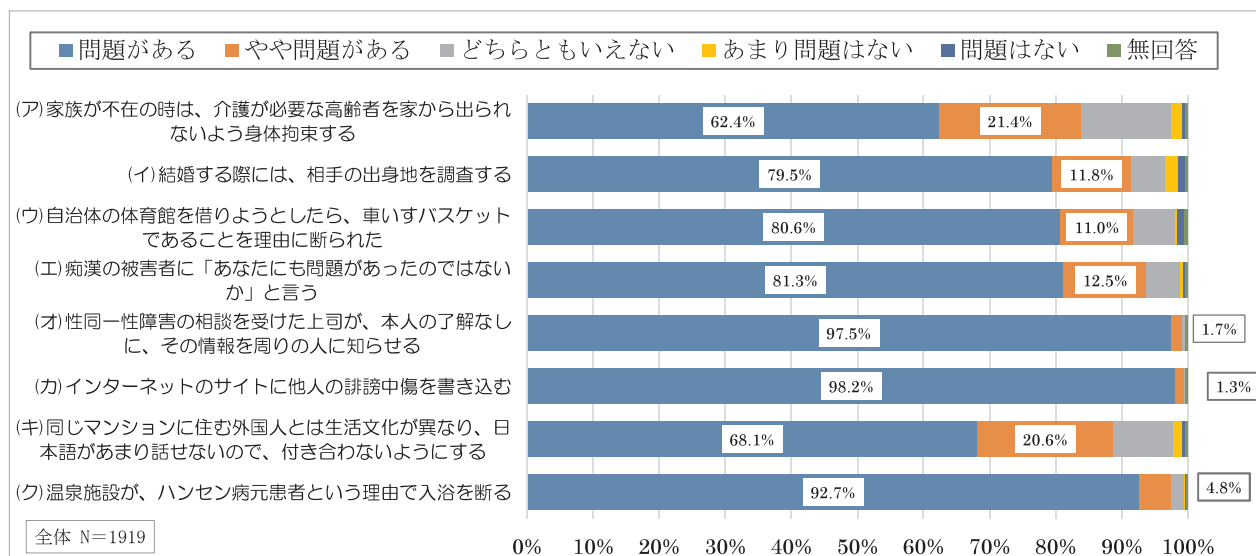
(エ) 痴漢の被害者に「あなたにも問題があったのではないか」と言う

(オ) 性同一性障害の相談を受けた上司が、本人の了解なしに、その情報を周りの人に知らせる

(カ) インターネットのサイトに他人の誹謗中傷を書き込む

(キ) 同じマンションに住む外国人とは生活文化が異なり、日本語があまり話せないので、付き合わないようにする

(ク) 温泉施設が、ハンセン病元患者という理由で入浴を断る



各項目の「問題がある」と回答した割合を年齢層ごとに示すと次のようになる。

項目(ア)、(イ)、(エ)、(キ)、(ク)については、年齢層別の回答傾向に明確な差が認められる。項目(オ)、(カ)については問題意識が高く、年齢層別の有意な差はみられない。項目(ウ)については、わずかな差ではあるが、20歳代が最も高くなっている。

	50歳以上	40歳代	30歳代	20歳代	差
(ア) 家族が不在の時は、介護が必要な高齢者を家から出られないよう身体拘束する	67.0	62.9	56.2	54.1	12.9P
(イ) 結婚する際には、相手の出身地を調査する	84.5	80.0	75.3	67.2	17.3P
(ウ) 自治体の体育館を借りようとしたら、車いすバスケットであることを理由に断られた	80.0	79.8	81.5	83.2	3.4P
(エ) 痴漢の被害者に「あなたにも問題があったのではないか」と言う	84.5	82.4	79.1	72.4	12.1P
(オ) 性同一性障害の相談を受けた上司が、本人の了解なしに、その情報を周りの人に知らせる	97.9	97.6	97.6	96.3	1.6P
(カ) インターネットのサイトに他人の誹謗中傷を書き込む	99.1	98.3	96.9	96.6	2.5P
(キ) 同じマンションに住む外国人とは生活文化が異なり、日本語があまり話せないので、付き合わないようにする	73.8	72.4	58.2	54.5	19.3P
(ク) 温泉施設が、ハンセン病元患者という理由で入浴を断る	94.7	94.3	91.1	85.1	9.6P

問3 あなたは、人権問題に関する知識や情報を得る手段としてどのようなことが有効だと思いますか。(ア)～(ケ)それぞれについて、いずれか1つに○をつけてください。

1 有効である 2 やや有効である 3 どちらともいえない 4 あまり有効でない 5 有効でない

(ア) 行政（県や市町村等）が行う研修会

(イ) 研究団体等が行う研修会

(ウ) 当事者団体等が行う地域での自主的な学習会

(エ) 校内研修会

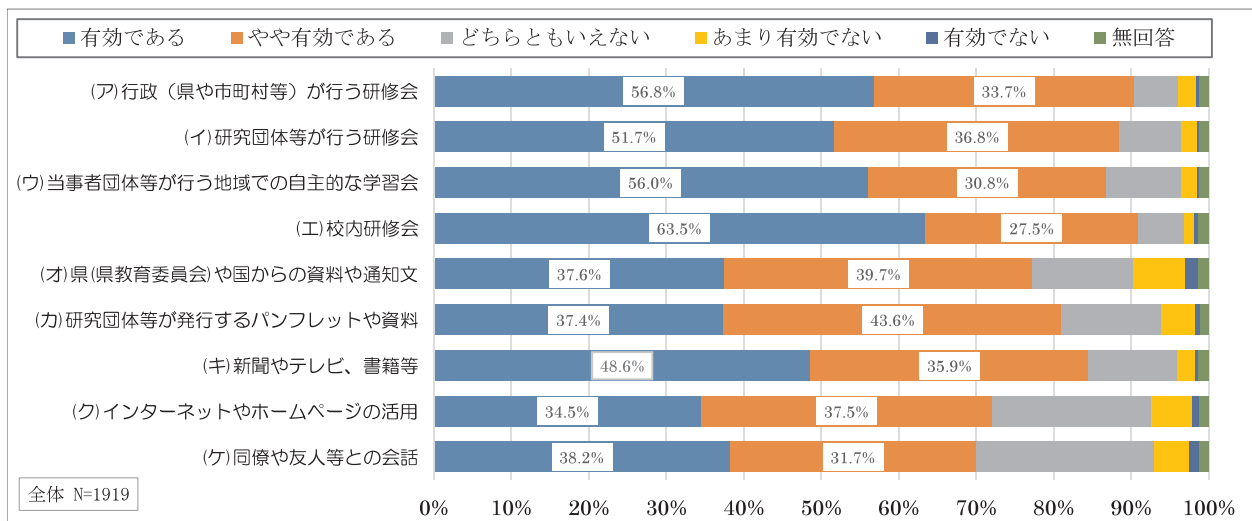
(オ) 県(県教育委員会)や国からの資料や通知文

(カ) 研究団体等が発行するパンフレットや資料

(キ) 新聞やテレビ、書籍等

(ク) インターネットやホームページの活用

(ケ) 同僚や友人等との会話



この設問は、回答傾向に年齢層の特徴がみられる。どの手段についても「有効である」とする積極的な回答をした割合は、50歳以上が最も高く、20歳代が最も低くなっている。

	50歳以上	40歳代	30歳代	20歳代
(ア)行政（県や市町村等）が行う研修会	60.7	56.4	55.1	46.3
(イ)研究団体等が行う研修会	56.4	50.7	48.6	40.7
(ウ)当事者団体等が行う地域での自主的な学習会	59.5	54.0	54.1	49.3
(エ)校内研修会	67.9	64.0	59.2	53.0
(オ)県(県教育委員会)や国からの資料や通知文	42.3	39.8	31.8	24.6
(カ)研究団体等が発行するパンフレットや資料	41.1	37.4	34.2	28.4
(キ)新聞やテレビ、書籍等	51.8	48.1	47.3	39.6
(ク)インターネットやホームページの活用	36.4	34.8	32.5	29.9
(ケ)同僚や友人等との会話	39.5	36.7	37.3	36.9

各年齢層、各校種とも「(エ) 校内研修会」を有効とする割合が最も高いが、その割合は小学校が最も高く、高等学校が最も低い。

校内研修会が「有効である」と答えた割合	小学校	中学校等	高等学校	特別支援学校
	69.4	60.1	58.7	59.6

問4 あなたは、さまざまな人権課題に関連する次のような法律や用語等について、どのような認識ですか。(ア)～(コ)それぞれについて、いずれか1つに○をつけてください。

1 人に説明できる 2 内容はおおよそ知っている 3 言葉だけは聞いたことがある 4 知らない

(ア) 人権教育及び人権啓発の推進に関する法律

(イ) DV(ドメスティックバイオレンス)

(ウ) 児童虐待の防止等に関する法律(児童虐待防止法)

(エ) インターネットによる人権侵害

(オ) 自己に関する情報をコントロールする権利

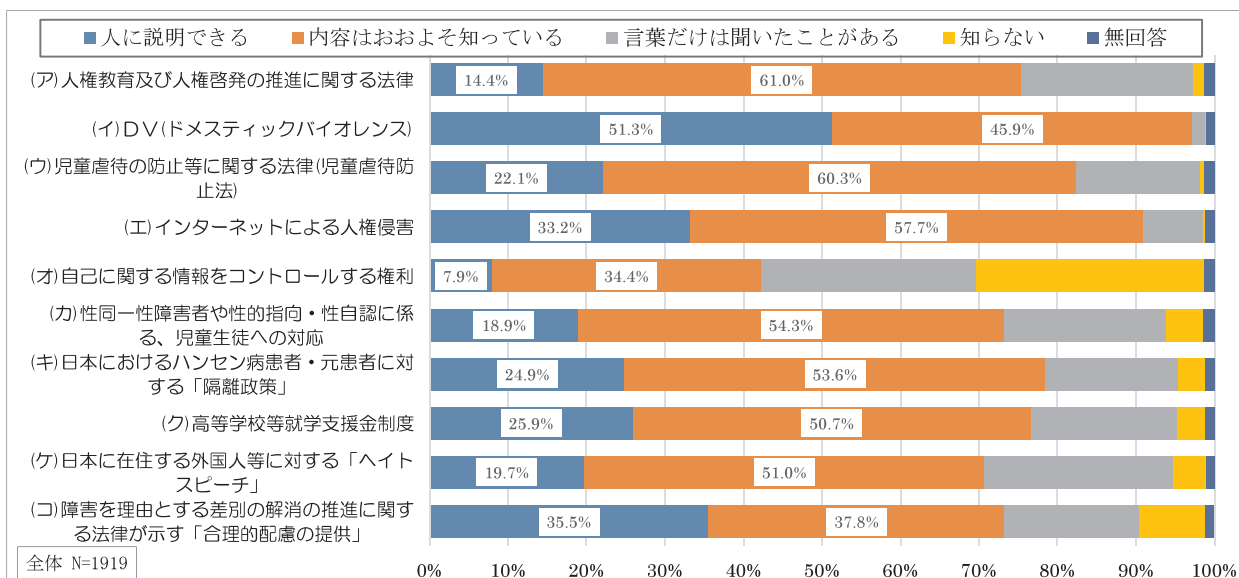
(カ) 性同一性障害者や性的指向・性自認に係る、児童生徒への対応

(キ) 日本におけるハンセン病患者・元患者に対する「隔離政策」

(ク) 高等学校等就学支援金制度

(ケ) 日本に在住する外国人等に対する「ヘイトスピーチ」

(コ) 障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律が示す「合理的配慮の提供」



この設問についても、項目の回答傾向に年齢層の特徴がみられた。該当項目について、「人に説明できる」とした割合が高い年齢層を順に示すと次のようになる。

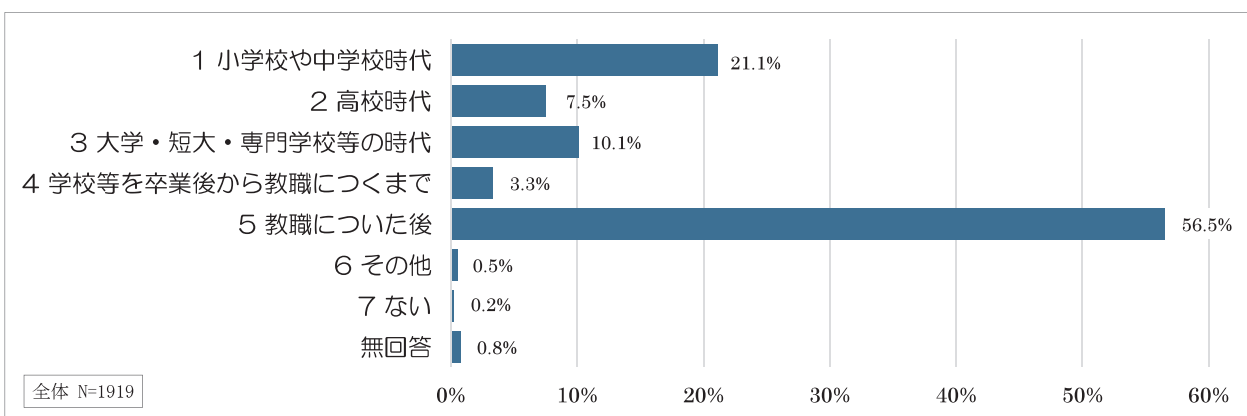
	50歳以上	40歳代	30歳代	20歳代	差
(ア) 人権教育及び人権啓発の推進に関する法律	21.2	11.7	6.2	5.2	16.0P
(ウ) 児童虐待の防止等に関する法律(児童虐待防止法)	25.7	20.0	19.5	16.8	8.9P
(エ) インターネットによる人権侵害	37.2	32.4	28.4	27.2	10.0P
(オ) 自己に関する情報をコントロールする権利	10.9	7.9	3.8	2.6	8.3P
(カ) 性同一性障害者や性的指向・性自認に係る、児童生徒への対応	22.9	16.4	13.7	14.2	9.2P
(キ) 日本におけるハンセン病患者・元患者に対する「隔離政策」	32.7	21.7	16.4	12.7	20.0P
(ク) 高等学校等就学支援金制度	31.4	28.3	18.5	12.3	19.1P
(ケ) 日本に在住する外国人に対する「ヘイトスピーチ」	24.4	17.9	15.4	13.4	11.0P
(コ) 障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律が示す「合理的配慮の提供」	38.3	34.5	31.2	33.6	7.1P

以上の年齢層間の差とは逆に、「(イ) DV(ドメスティックバイオレンス)」については「人に説明できる」とした割合は、次に示すようにわずかな差ではあるが、20歳代が最も高い。

	20歳代	30歳代	50歳以上	40歳代	差
(イ) DV(ドメスティックバイオレンス)	55.2	52.4	51.4	48.3	6.9P

問5 あなたが、差別や人権についてもっとも深く考える契機となったのは、いつですか。
次のうちから1つに○をつけてください。

- 1 小学校や中学校時代
- 2 高校時代
- 3 大学・短大・専門学校等の時代
- 4 学校等を卒業後から教職につくまで
- 5 教職についた後
- 6 その他(具体的に)
- 7 ない



全体の回答では、「5 教職についた後」(56.5%)と最も多く、「1 小学校や中学校時代」(21.1%)、「3 大学・短大・専門学校等の時代」(10.1%)、「2 高校時代」(7.5%)の順となっている。

各年齢層とも、高い割合の順は全体で示した順と同様である。上位4項目について各時期を選択した割合を年齢層ごとに高い順に示すと次のようになる。

5 教職についた後	50 歳以上	40 歳代	30 歳代	20 歳代	差
	62.0	56.2	50.0	44.8	17.2P

「5 教職についた後」については、経験年数に差があり、50 歳以上が最も高く、年齢層が高い方がそれを選択する割合は高い。

1 小学校や中学校時代	30 歳代	40 歳代	20 歳代	50 歳以上	差
	31.5	25.0	24.3	15.1	16.4P

「1 小学校や中学校時代」を30 歳代の31.5%が選択しており、他の年齢層より高い割合を示している。

3 大学・短大・専門学校等の時代	20 歳代	50 歳以上	40 歳代	30 歳代	差
	18.7	9.6	7.9	6.8	11.9P

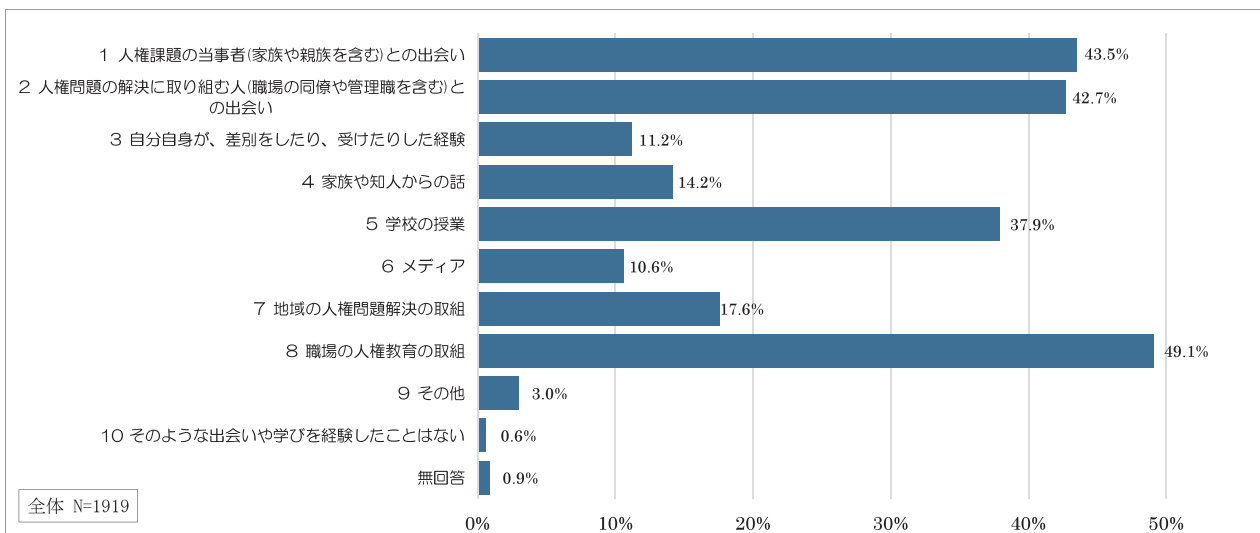
「3 大学・短大・専門学校等の時代」とした割合は、20 歳代が18.7%で、他の年齢層より9～12ポイント高くなっている。

2 高校時代	50 歳以上	20 歳代	40 歳代	30 歳代	差
	8.9	7.8	6.4	4.1	4.8P

「2 高校時代」とした割合は、特に年齢層で大きな差はない。

問6 あなたが、差別や人権についてもっとも深く考える契機となったのは、どのような出会いや学びですか。次のうちからあてはまるもの（複数回答可）に○をつけ、その内容を具体的にお書きください。

- 1 人権課題の当事者(家族や親族を含む)との出会い
- 2 人権問題の解決に取り組む人(職場の同僚や管理職を含む)との出会い
- 3 自分自身が、差別をしたり、受けたりした経験
- 4 家族や知人からの話
- 5 学校の授業
- 6 メディア
- 7 地域の人権問題解決の取組
- 8 職場の人権教育の取組
- 9 その他
- 10 そのような出会いや学びを経験したことはない



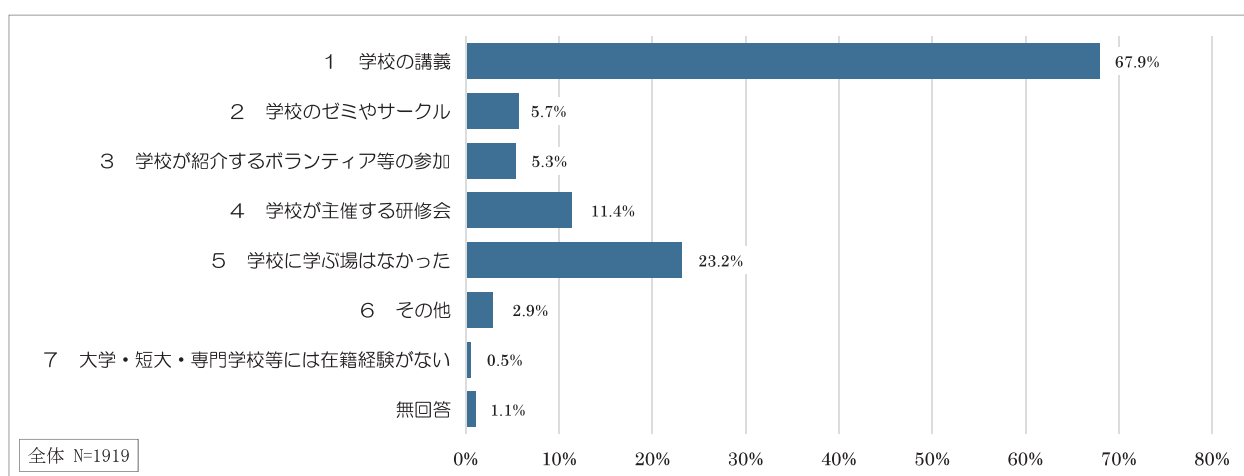
全体の回答では、「8 職場の人権教育の取組」が 49.1%と最も多く、次いで「1 人権課題の当事者(家族や親族を含む)との出会い」(43.5%)、「2 人権問題の解決に取り組む人(職場の同僚や管理職を含む)との出会い」(42.7%)、「5 学校の授業」(37.9%)となっている。

各項目を年齢層別で示すと、次のようになる。

	50 歳以上	40 歳代	30 歳代	20 歳代
1 人権課題の当事者(家族や親族を含む)との出会い	51.2	42.1	33.2	31.7
2 人権問題の解決に取り組む人(職場の同僚や管理職を含む)との出会い	50.2	42.1	32.2	29.5
3 自分自身が、差別をしたり、受けたりした経験	11.4	11.2	12.0	9.7
4 家族や知人の話	14.2	13.3	14.7	14.6
5 学校の授業	29.5	39.5	46.2	53.4
6 メディア	9.8	9.5	8.9	17.9
7 地域の人権問題解決の取組	19.6	17.6	15.8	12.7
8 職場の人権教育の取組	53.0	48.1	44.2	42.9

問7 大学・短大・専門学校等において、あなたにとって、人権教育に関してどのような学び場がありましたか。あてはまるものすべてに○をつけてください。

- 1 学校の講義
- 2 学校のゼミやサークル
- 3 学校が紹介するボランティア等の参加
- 4 学校が主催する研修会
- 5 学校に学ぶ場はなかった
- 6 その他(具体的に)
- 7 大学・短大・専門学校等には在籍経験がない



全体の回答では、「1 学校の講義」(67.9%)と最も多く、次に「5 学校に学ぶ場はなかった」(23.2%)となっている。

選択した割合を年齢層別に示すと次のようになる。どの年齢層にも共通して、最も多いのが「1 学校の講義」、次が「5 学校に学ぶ場はなかった」である。「1 学校の講義」を回答した割合は、50歳以上の約60%、30・40歳代の約70%に対して20歳代は80%を超えている。「4 学校が主催する研修会」(8～12%)、「2 学校のゼミやサークル」(4～7%)、「3 学校紹介のボランティア等の参加」(3～8%)は、選択した数が少なく有意な差を見ることはできなかった。

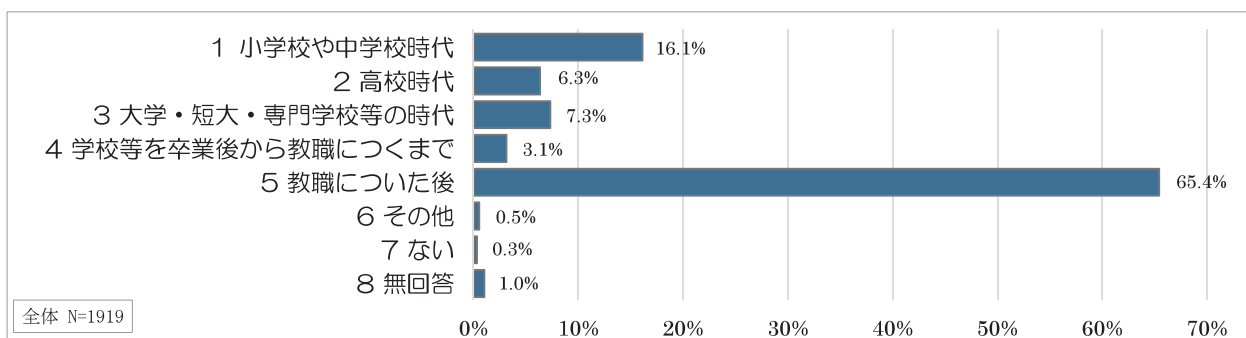
	50歳以上	40歳代	30歳代	20歳代	差
1 学校の講義	62.6	71.4	70.2	81.0	18.4P
2 学校のゼミやサークル	4.6	6.2	7.2	7.1	2.6P
3 学校が紹介するボランティア等の参加	4.2	3.8	8.2	8.2	4.4P
4 学校が主催する研修会	12.2	11.9	8.9	10.1	3.3P
5 学校に学ぶ場はなかった	26.5	21.4	21.9	14.9	11.6P

「1 学校の講義」、「5 学校に学ぶ場はなかった」を選択した割合を校種別に見ると次のようになった。

	小学校	中学校等	高等学校等	特別支援学校	差
1 学校の講義	73.9	68.5	61.0	65.5	12.9P
5 学校に学ぶ場はなかった	19.2	23.8	28.8	21.1	9.6P

問8 あなたが、同和問題についてもっとも深く考える契機となったのは、いつだと思えますか。次のうちから1つに○をつけてください。

- 1 小学校や中学校時代
- 2 高校時代
- 3 大学・短大・専門学校等の時代
- 4 学校等を卒業後から教職につくまで
- 5 教職についた後
- 6 その他(具体的に)
- 7 ない



回答した割合を高い順に示すと、次のようになる。

(/) 内の右側の数字は、問5の同じ選択肢の割合で、比較のために示す

- ① 5 教職についた後 (65.4% / 56.5%)
- ② 1 小学校や中学校時代 (16.1% / 21.1%)
- ③ 3 大学・短大・専門学校等の時代 (7.3% / 10.1%)
- ④ 2 高校時代 (6.3% / 7.5%)
- ⑤ 4 学校卒業後教職につくまで (3.1% / 3.3%)

各年齢層とも、高い割合の順は全体の平均で示した順と同様である。上位4項目について各時期を選択した割合を年代ごとに高い順に示すと次のようになる。

5 教職についた後	50歳以上	40歳代	30歳代	20歳代	差
	73.5 / 62.0	62.9 / 56.2	58.6 / 50.0	49.6 / 44.8	23.9P / 17.2P

「5 教職についた後」を選択する割合は、各年齢層とも、人権問題との出会いより 11.5 ポイント(50歳以上)～4.8 ポイント(20歳代)高くなっている。教職についてから同和問題と出会ったとする割合が、年齢層が高くなるほど多くなっている。

1 小学校や中学校時代	30歳代	20歳代	40歳代	50歳以上	差
	26.7 / 31.5	21.3 / 24.3	19.3 / 25.0	9.5 / 15.1	17.2P / 16.4P

問5の結果では20歳代と40歳代が入れ替わっている。

3 大学・短大・専門学校等の時代	20歳代	50歳以上	40歳代	30歳代	差
	16.4 / 18.7	6.2 / 9.6	6.2 / 7.9	3.8 / 6.8	12.6P / 11.9P

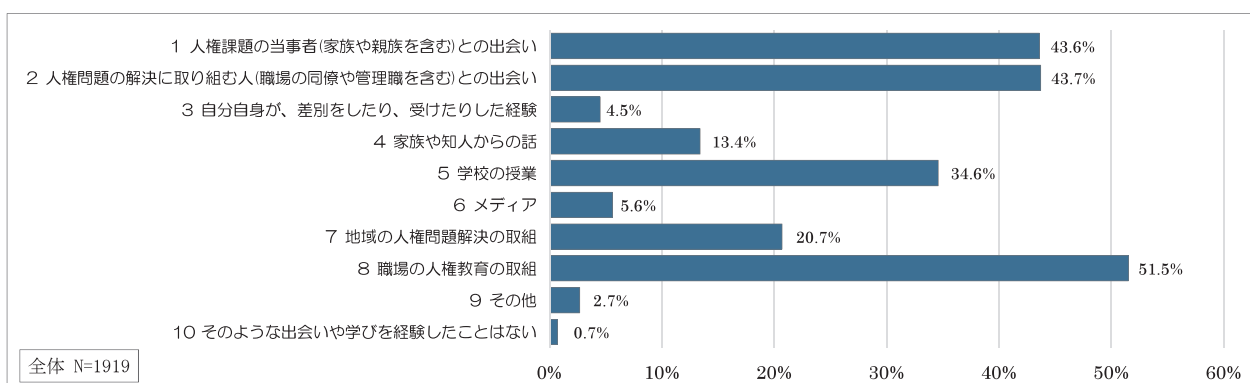
20歳代では、「3 大学・短大・専門学校等の時代」とした割合が 16.4%で、他の年齢層より 10～12 ポイント高い。

2 高校時代	20歳代	40歳代	50歳以上	30歳代	差
	8.2 / 7.8	7.4 / 6.4	5.8 / 8.9	4.8 / 4.1	3.4P / 4.8P

20歳代の「2 高校時代」とした割合が 8.2%で、わずかだが他の年齢層より高くなっている。

問9 あなたが、同和問題についてもっとも深く考える契機となったのは、どのような出会いや学びですか。次のうちからあてはまるもの（複数回答可）に○をつけ、その内容を具体的にお書きください。

- 1 人権課題の当事者(家族や親族を含む)との出会い
- 2 人権問題の解決に取り組む人(職場の同僚や管理職を含む)との出会い
- 3 自分自身が、差別をしたり、受けたりした経験
- 4 家族や知人からの話
- 5 学校の授業
- 6 メディア
- 7 地域の人権問題解決の取組
- 8 職場の人権教育の取組
- 9 その他
- 10 そのような出会いや学びを経験したことはない



問6（人権問題）と比べ、全体では、項目2と1の順位及び項目6と3の順位が入れ替わったことの2点である。

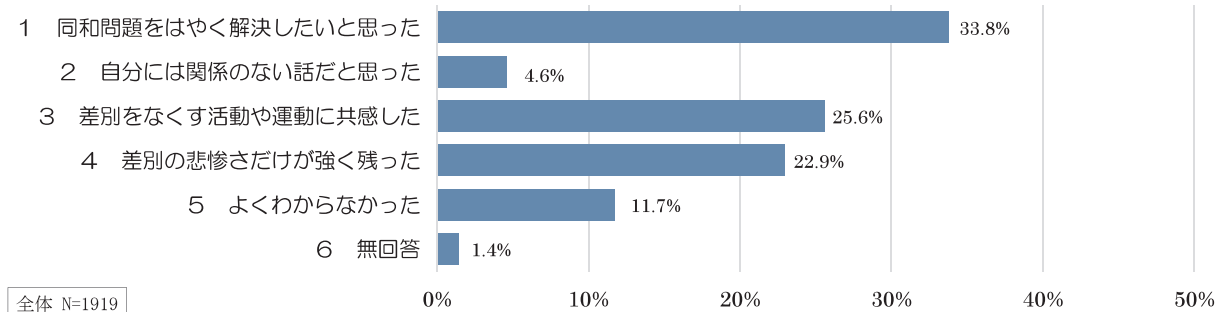
年齢層別も、問6と比べ、「5 学校の授業」が少し減り、「8 職場の人権教育の取組」が少し増える傾向を示した。特に、30歳代にあつては、「8 職場の人権教育の取組」が4.4ポイント増えている。また、50歳以上では同和問題に深く向き合う契機として「1 人権課題当事者との出会い」や「2 人権問題の解決に取り組む人との出会い」の割合が問6より更に高くなる傾向を示している。一方、20歳代は、問6よりも「1 人権課題の当事者との出会い」が8.2ポイント少なく、30歳代、40歳代ともに少ない傾向を示している。

	50歳以上	40歳代	30歳代	20歳代
1 人権課題の当事者(家族や親族を含む)との出会い	54.8	41.9	29.8	23.5
2 人権問題の解決に取り組む人(職場の同僚や管理職を含む)との出会い	53.3	42.1	30.8	28.7
3 自分自身が、差別をしたり、受けたりした経験	5.1	4.3	4.1	2.6
4 家族や知人の話	13.9	12.4	12.7	13.4
5 学校の授業	26.0	38.6	43.2	47.8
6 メディア	6.1	4.5	6.5	5.6
7 地域の人権問題解決の取組	21.7	21.4	19.5	16.8
8 職場の人権教育の取組	55.5	49.8	48.6	44.4

また、校種別にみると「職場の人権教育の取組」が、小学校は55.3%、中学校は56.5%、高等学校は47.6%であり、各校種とも問6（小学校52.9%、中学校51.4%、高等学校45.1%）よりも高い割合を示している。特別支援学校で最も高いのは、問6では「人権課題の当事者との出会い」だったが、ここでは「職場の人権教育の取組」が最も高くなっている。

問 10 あなたが、同和問題を初めて知った時の気持ちにもっとも近いと思うものを次のうちから1つに○をつけてください。

- 1 同和問題を早く解決したいと思った
- 2 自分には関係のない話だと思った
- 3 差別をなくす活動や運動に共感した
- 4 差別の悲惨さだけが強く残った
- 5 よくわからなかった



選択した割合を高い順に並べると、①「1 同和問題を早く解決したいと思った」(33.8%) ②「3 差別をなくす活動や運動に共感した」(25.6%) ③「4 差別の悲惨さだけが強く残った」(22.9%)、④「5 よくわからなかった」(11.7%) ⑤「2 自分には関係のない話だと思った」(4.6%) となる。

なお、各選択肢ごとに、選択した年齢層別の割合を示すと次のようになる。

	50 歳以上	40 歳代	30 歳代	20 歳代	差
1 同和問題を早く解決したいと思った	36.2	36.9	26.4	30.2	10.5P
2 自分には関係ない話だと思った	4.9	4.5	5.5	2.6	2.9P
3 差別をなくす活動や運動に共感した	28.2	25.0	25.0	19.8	8.4P
4 差別の悲惨さだけが強く残った	18.2	21.2	28.4	34.3	16.1P
5 よくわからなかった	10.8	10.7	13.7	13.1	3.0P

肯定的な印象と考えられる「1 同和問題を早く解決したいと思った」、「3 差別をなくす活動や運動に共感した」を合わせた割合を高い順に示すと次のようになる。

「1 同和問題を早く解決したいと思った」、「3 差別をなくす活動や運動に共感した」を合わせた割合	50 歳以上	40 歳代	30 歳代	20 歳代	差
	64.4	61.9	51.4	50.0	14.4P

否定的な印象と考えられる「2 自分には関係ない話だと思った」、「4 差別の悲惨さだけが強く残った」、「5 よくわからなかった」を合わせた割合を高い順に示すと次のようになる。

「2 自分には関係ない話だと思った」、「4 差別の悲惨さだけが強く残った」、「5 よくわからなかった」を合わせた割合	20 歳代	30 歳代	40 歳代	50 歳以上	差
	50.0	47.6	36.4	33.9	16.1P

問 11 あなたは、次のさまざまな法律や制度・用語等について、どのような認識ですか。
(ア)～(ク)それぞれについて、いずれか1つに○をつけてください。

1 人に説明できる 2 内容はおおよそ知っている 3 言葉だけは聞いたことがある 4 知らない

(ア) 明治政府の「解放令」

(イ) 水平社宣言

(ウ) 同和对策審議会答申

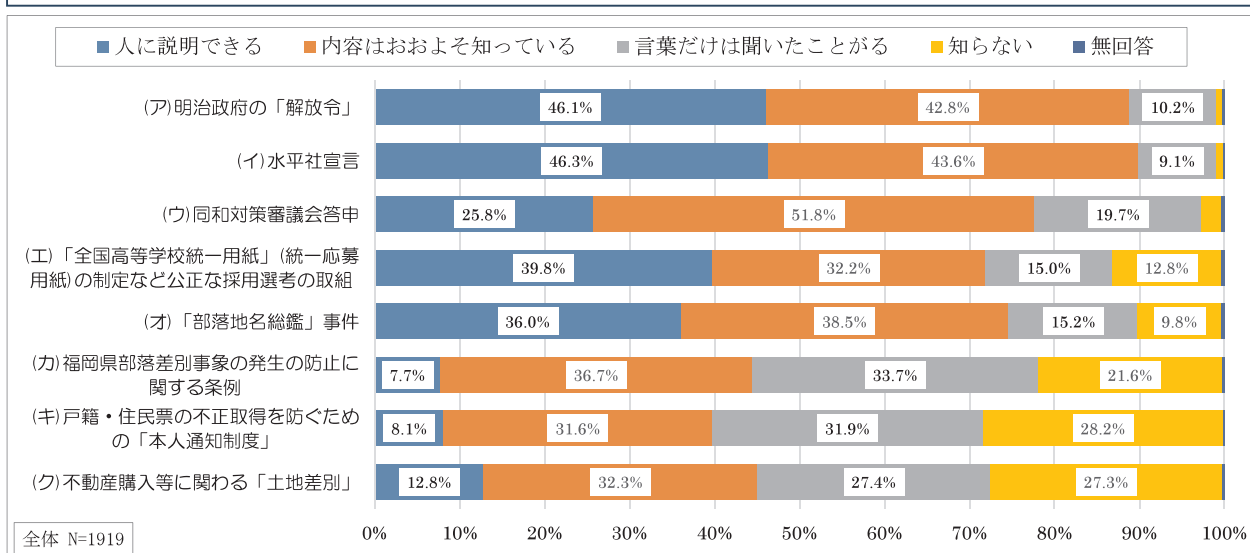
(エ) 「全国高等学校統一用紙」(統一応募用紙)の制定など公正な採用選考の取組

(オ) 「部落地名総鑑」事件

(カ) 福岡県部落差別事象の発生の防止に関する条例

(キ) 戸籍・住民票の不正取得を防ぐための「本人通知制度」

(ク) 不動産購入等に関わる「土地差別」



回答傾向に年齢層の特徴がみられる項目がある。項目について、「人に説明できる」とした年齢層別の割合を示すと次のようになる。

	50 歳以上	40 歳代	30 歳代	20 歳代	差
(ア) 明治政府の「解放令」	56.2	44.0	37.7	23.5	32.7P
(イ) 水平社宣言	57.3	44.5	38.4	20.5	36.8P
(ウ) 同和对策審議会答申	35.8	26.4	11.6	6.3	29.5P
(エ) 「全国高等学校統一用紙」など公正な採用選考の取組	48.2	43.3	30.1	16.4	31.8P
(オ) 「部落地名総鑑」事件	45.8	32.4	26.7	18.7	27.1P
(カ) 福岡県部落差別事象の発生の防止に関する条例	10.3	7.9	4.1	2.6	7.7P
(キ) 戸籍・住民票の不正取得を防ぐための「本人通知制度」	9.5	7.4	7.9	4.5	5.0P
(ク) 不動産購入等に関わる「土地差別」	16.1	11.0	11.0	6.7	9.4P

どの法律や用語についても「説明できる」とする割合は、50 歳以上が最も高く、年齢層の順に低くなっている。

問 12 次のさまざまな意見について、あなたの考えに最も近いものはどれですか。(ア)～(キ)それぞれについて、いずれか1つに○をつけてください。

1 そう思う 2 ややそう思う 3 どちらともいえない 4 あまりそう思わない 5 まったくそう思わない

(ア) 部落差別に対して、心から怒りを感じる

(イ) 同和地区の住民だけに特別な施策を実施したこと自体が差別だ

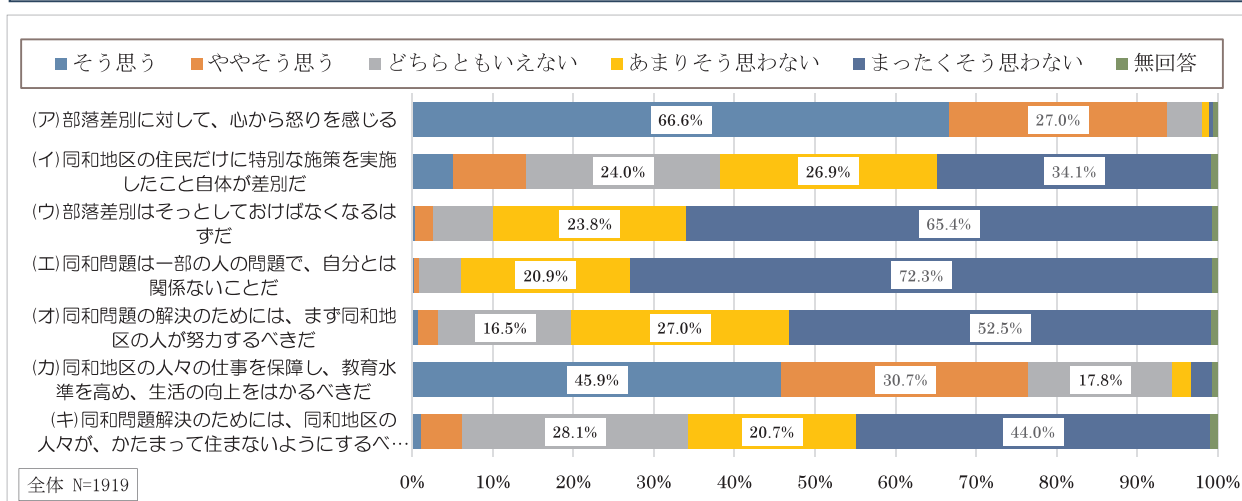
(ウ) 部落差別はそっとしておけばなくなるはずだ

(エ) 同和問題は一部の人の問題で、自分とは関係ないことだ

(オ) 同和問題の解決のためには、まず同和地区の人が努力するべきだ

(カ) 同和地区の人々の仕事を保障し、教育水準を高め、生活の向上をはかるべきだ

(キ) 同和問題解決のためには、同和地区の人々が、かたまって住まないようにするべきだ



全体の回答では、項目（ア）、（カ）では、「そう思う」と選択した割合が最も多く、その他の項目では、「まったくそう思わない」と選択した割合が最も多い。

各選択肢ごとに、選択した（項目（ア）、（カ）については「そう思う」、それ以外については「まったくそう思わない」）割合を年齢層に示すと次のようになる。

（▲は、「まったくそう思わない」の割合、他は「そう思う」の割合）

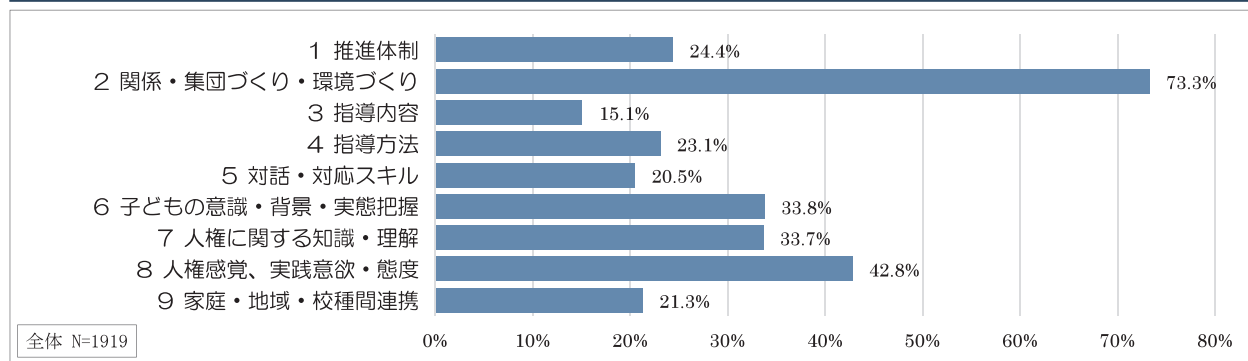
	50 歳以上	40 歳代	30 歳代	20 歳代	差
(ア) 部落差別に対して、心から怒りを感じる	75.1	65.7	59.6	47.0	28.1P
(イ) 同和地区の住民だけに特別な施策を実施したこと自体が差別だ	▲48.6	▲32.1	▲18.5	▲6.7	41.9P
(ウ) 部落差別はそっとしておけばなくなるはずだ	▲72.9	▲66.2	▲58.9	▲47.8	25.1P
(エ) 同和問題は一部の人の問題で、自分とは関係ないことだ	▲80.2	▲75.0	▲64.0	▲50.7	29.5P
(オ) 同和問題の解決のためには、まず同和地区の人が努力すべきだ	▲57.6	▲54.8	▲47.9	▲37.7	19.9P
(カ) 同和地区の人々の仕事を保障し、教育水準を高め、生活の向上を図るべきだ	52.4	43.8	40.1	34.0	18.4P
(キ) 同和問題解決のためには、同和地区の人々が、かたまって住まないようにするべきだ	▲51.2	▲41.7	▲38.4	▲29.1	22.1P

各項目について選択した割合（項目（ア）、（カ）については「そう思う」、それ以外については「まったくそう思わない」）が、どの設問も 50 歳以上が高く、年齢層が下がると、割合も下がっている。その差が約 20 ポイント～40 ポイントに及ぶという結果となっている。

**問 13 あなたが、学校における人権教育を進める上で特に重要だと思う内容は、何ですか。
次のうちから3つまでの範囲で○をつけてください。**

- | | |
|---|--------------------|
| 1 学校における人権教育の推進体制等に関する内容
(組織、計画、取組の評価など) | 【1 推進体制】 |
| 2 児童生徒の関係づくり、学級等の集団づくり、人権が尊重される環境づくり等に関する内容 | 【2 関係・集団づくり・環境づくり】 |
| 3 人権教育の指導内容等に関する内容 | 【3 指導内容】 |
| 4 人権教育の指導方法等に関する内容
(「協力」「参加」「体験」を取り入れた指導方法、児童生徒の自主性を尊重した指導方法など) | 【4 指導方法】 |
| 5 聞く技術、話す技術をはじめ、他者との対話・対応スキルに関する内容 | 【5 対話・対応スキル】 |
| 6 子どもの意識、子どもが抱える問題などについての現状・背景等に関する内容 | 【6 子どもの意識・背景・実態把握】 |
| 7 人権尊重の理念や個別的な人権課題等に対する教職員自身の知識・理解を深めるための内容 | 【7 人権に関する知識・理解】 |
| 8 教職員自身の人権感覚の涵養のための内容
(ステレオタイプや偏見を見極める感覚、人権の実現のために行動しようとする意欲・態度など) | 【8 人権感覚、実践意欲・態度】 |
| 9 家庭・地域、関係機関との連携や校種間の連携した内容 | 【9 家庭・地域・校種間連携】 |

選択肢の内容を簡略化して、次の【 】内を見出しとした



各年齢層別の上位5項目を挙げると次のようになる。

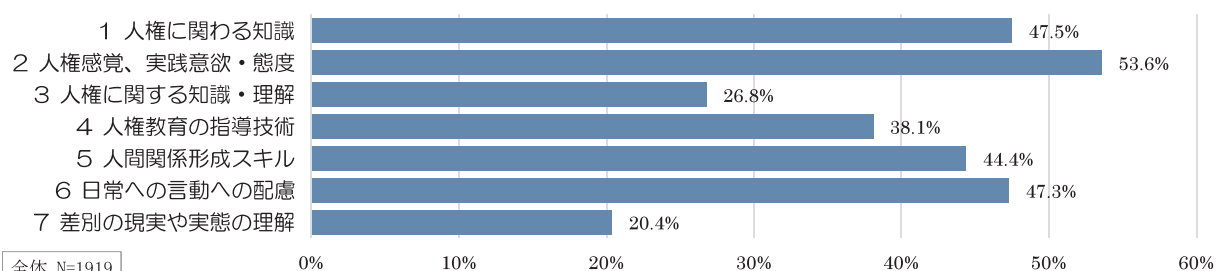
	20 歳代	30 歳代	40 歳代	50 歳以上
①	2 関係・集団づくり・環境づくり (73.9%)	2 関係・集団づくり・環境づくり (75.7%)	2 関係・集団づくり・環境づくり (72.9%)	2 関係・集団づくり・環境づくり (72.2%)
②	6 子どもの意識・背景・実態把握度 (40.7%)	8 人権感覚、実践意欲・態度 (39.4%)	8 人権感覚、実践意欲・態度 (40.5%)	8 人権感覚、実践意欲・態度 (45.6%)
③	8 人権感覚、実践意欲・態度 (39.2%)	6 子どもの意識・背景・実態把握度 (37.7%)	6 子どもの意識・背景・実態把握度 (36.0%)	7 人権に関する知識・理解 (36.5%)
④	7 人権に関する知識・理解 (31.0%)	7 人権に関する知識・理解 (30.5%)	7 人権に関する知識・理解 (31.2%)	1 推進体制 (29.5%)
⑤	5 対話・対応スキル (27.6%)	5 対話・対応スキル (26.7%)	1 推進体制 (22.9%)	6 子どもの意識・背景・実態把握度 (29.4%)

各年齢層、各校種、各職種とも、「2 児童生徒の関係づくり、学級等の集団づくり、人権が尊重される環境づくり等に関する内容」が高い割合(約70～80%)で1位である。

2位以下は、年齢層によりやや異なる傾向が示されている。20歳代では2位、30歳代、40歳代は3位に「6 子どもの意識、子どもが抱える問題などについての現状・背景等に関する内容」が挙げられる。一方50歳以上は、2位に「8 教職員自身の人権感覚の涵養のための内容」、3位に「7 人権尊重の理念や個別的な人権課題等に対する教職員自身の知識・理解を深めるための内容」が挙げられる。さらに、4位に「学校における人権教育の推進体制等に関する内容」が挙げられるなど、特徴がみられる。

問 14 あなたは、児童生徒の人権教育に携わるに当たって、現在、あなた自身が特に身に付けなければならないことは何ですか。次のうちから3つまでの範囲で○をつけてください。

- 1 人権に関わる知識を深めること 【1 人権に関わる知識】
(人権発展の歴史や人権侵害の現状について、関連の法規・条約についてなど)
- 2 人権感覚を養うこと 【2 人権感覚、実践意欲・態度】
(ステレオタイプや偏見を見きわめる感覚、人権の実現のために行動しようとする意欲・態度など)
- 3 自分に身近な人権問題、個別の人権課題等に関する理解を深めること 【3 人権に関する知識・理解】
- 4 人権教育の指導技術を高めること 【4 人権教育の指導技術】
(人権学習への主体的参加意欲の喚起、効果的な発問、気付きへの導きなど)
- 5 児童生徒をはじめとした他者との望ましい人間関係を形成するためのスキルを高めること 【5 人間関係形成スキル】
(他者に受容的に接する技能、共感的な人間関係を築く力など)
- 6 人権尊重の観点から、日常の様々な場面における言動等に配慮すること 【6 日常の言動への配慮】
- 7 家庭訪問等をとおして、個別の人権課題の被差別当事者の願いや思いを聴き、差別の現実や実態を理解すること 【7 差別の現実や実態の理解】



全体の回答では、「2 人権感覚を養うこと」が、53.6%と最も高く、次いで「1 人権に関わる知識を深めること」(47.5%)、「3 人権尊重の観点から、日常の様々な場面における言動等に配慮すること」(47.3%)、「5 児童生徒をはじめとした他者との望ましい人間関係を形成するためのスキルを高めること」(44.4%)となっている。

各年齢層別の結果については、上位5項目を挙げると次のようになる。

	20 歳代	30 歳代	40 歳代	50 歳以上
①	1 人権に関わる知識 (69.8%)	1 人権に関わる知識 (59.6%)	2 人権感覚、実践意欲・態度 (53.8%)	2 人権感覚、実践意欲・態度 (55.8%)
②	2 人権感覚、実践意欲・態度 (49.3%)	2 人権感覚、実践意欲・態度 (50.0%)	1 人権に関わる知識 (48.3%)	6 日常の言動への配慮 (47.7%)
③	4 人権教育の指導技術 (45.5%)	6 日常の言動への配慮 (48.3%)	6 日常の言動への配慮 (47.6%)	5 人間関係形成スキル (44.5%)
④	6 日常の言動への配慮 (44.4%)	5 人間関係形成スキル (44.9%)	5 人間関係形成スキル (45.7%)	1 人権に関わる知識 (37.0%)
⑤	5 人間関係形成スキル (41.8%)	4 人権教育の指導技術 (42.8%)	4 人権教育の指導技術 (39.5%)	4 人権教育の指導技術 (33.8%)

各年齢層に共通している特徴は、上位に「1 人権に関わる知識を深めること」、「2 人権感覚、実践意欲・態度」、下位に「3 自分に身近な人権問題、個別の人権課題等に関する理解を深めること」、「7 家庭訪問等をとおして、個別の人権課題の被差別当事者の願いや思いを聴き、差別の現実や実態を理解すること」が挙げられていることである。